

「弟はど」だ……」

夜な夜な

洞窟に出かける弟を心配して
後をつけて来た第一王子。

しかし弟と同じく

目の前に現れた蛇女に
自由を奪われてしまった。

「お前達は勇敢だけど頭が弱いねえ」

人間と魔物の筋肉の違いなのか、
体格的には差が無い筈の蛇女に
抑え付けられて、全く身動きが取れない。

「でも兄弟揃ってデカイじゃないか。
きっと父親もデカイね」



蛇女が手で胸を
グイグイと押し付けるせいで
王子の股間が摩擦されて
更に硬度を増していく。

「うっ……うっ」

「まさか兄まで童貞って事は
ないよねえ？」

蛇女の舌が口内から
胸元に拘束された
王子の肉棒に向かって
ニョロニョロと
伸びて行く。

「な、何をする気だ……」

「弟がどうして
毎晩ここに来るようになったか
知りたいだろ？」



ずぼっ！

肉棒の先端の裂け目に
蛇女の舌先が勢いよく侵入した。

「ううわあっ！」

自分が何をされるのか、
なんとなく想像し始めていた矢先に
想定を超える強さで
全身を走った衝撃に、
情けない声を挙げてしまう。

「くくく、しよっぱいねえ……
身体を清めずに来たのかい？」

グリグリとほじくるように
舌先が割れ目の中で円を描いて
押し広げようとする。

「は……はあっ！ ううっうっ」



「お、俺には婚約者が……」

「へえ、じゃあもう経験済み？」

尿道から舌先がずるるると
引き抜かれていく。

「っっっっっ」

先端まで抜け切るまで2秒程。
どれだけ奥深く侵入していたのか。

「まだ……相手には会った事もない」

「ああ、政略結婚かい。
王子様は大変だねえ……くくく」

口で労いの言葉をかけながらも
舌先が蛇女とは別の意思で
動いているように、王子の亀頭を
這い回り始める。

「あっ……あっ」



左手で胸を小刻みに上下して
竿の部分を擦り上げながら
舌を使って先端部分を弄ぶ。

「あああああ……力が抜けるっ……っ……」

「体も……も弟よりデカいけど、
喘ぎ声は同じだねえ」

蛇女の口内から舌へと伝う唾液が
棒の先端まで到達し、
舌で引き伸ばされる事で
性器全体が粘ついた唾液に
包まれている。

「うぐっ……はあっ……はあっ……」

身動きが取れないまま
たった一箇所だけを
執拗に責められる無力感は正しく
「犯されている」と言える。

「ああああ……おかしくなるっ」

「気持ちいいだろ？」



「ああうっ！ はああっ！」

舌の動きはどんどん激しくなり、
感覚の逃げ場が無いほどに
肉棒の全体、周囲180度を
舐め上げている。

もはや舐めるというより
締めていると言った方が正しい。

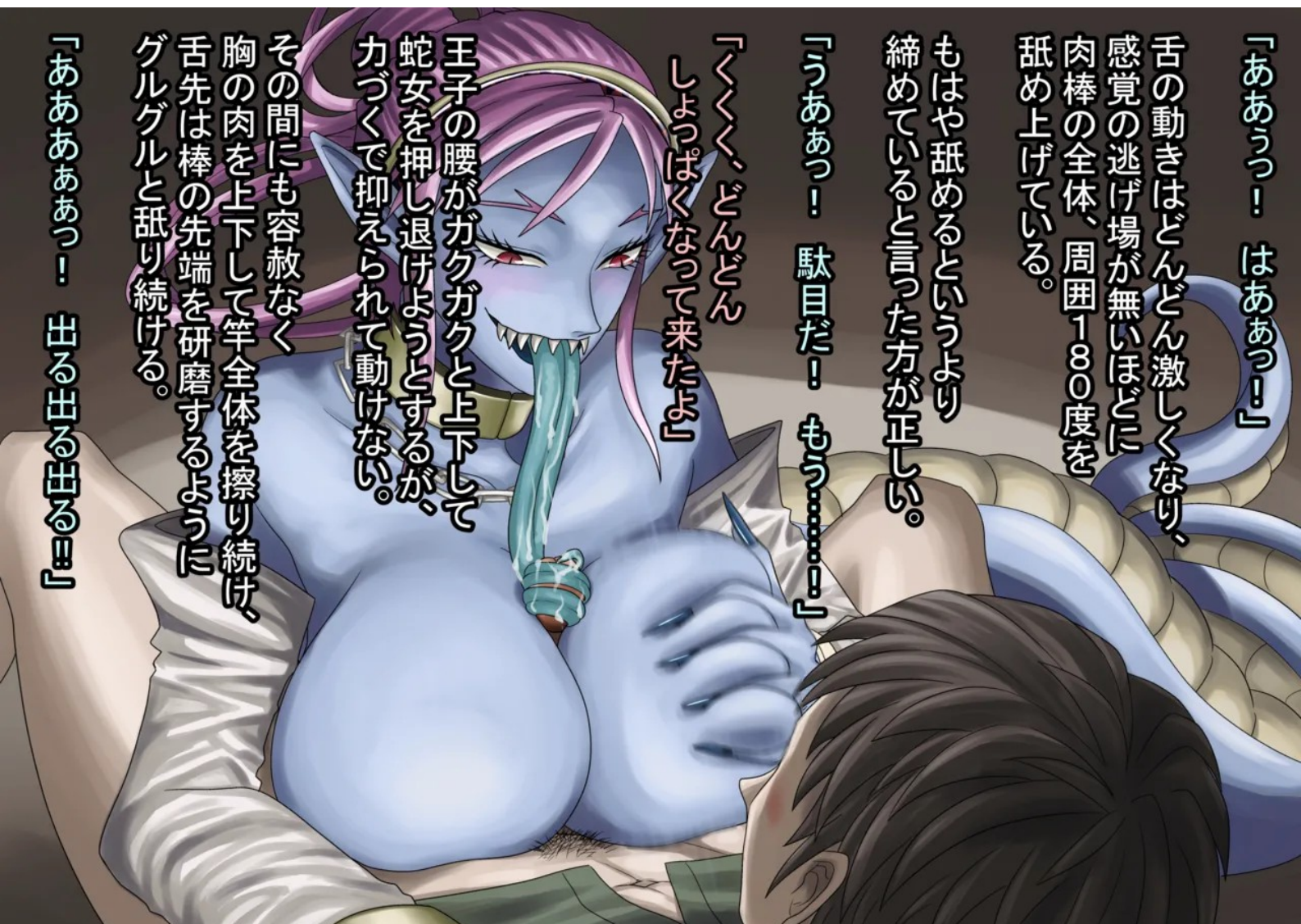
「うああっ！ 駄目だ！ もう……」

「くくく、どんどん
しょっぱくなって来たよ」

王子の腰がガクガクと上下して
蛇女を押し退けようとするが、
力づくで抑えられて動けない。

その間にも容赦なく
胸の肉を上下して竿全体を擦り続け、
舌先は棒の先端を研磨するように
グルグルと舐り続ける。

「あああああっ！ 出る出る出るっ！」



王子の全身が
飛び上がりそうなくらい跳ねると、
花火が爆発するかのように
大量の白液が宙を舞った。

「うあああああつ！ あああああつ！」

肉棒を締め上げる舌の隙間から
第二波、第三波と次々に
重量のある精液が放出される。

蛇女の顔も髪も胸も
パタパタと落ちる精液に汚され、
青白い身体が白く汚されていく。

「あああつ！ もう無理！ 駄目！」

女の子のように情けない声を挙げる
王子の意思などお構いなしに、
蛇女は噴射する棒の先端を
なおも胸肉で擦り上げ、
舌で激しく磨耗し続けている。

「ほら、もっと出るだろ？」

頑張りなよ、まだ止めてやんならよ」



「はあっ……はあっ……はあ……」

正気を失いそうな程の
激しい快感の時間が終わると、
ようやく舌の拘束から開放された。

「弟は奥で休んでるよ、今日もたっぷり
搾り取ってやったからね」

「ああ……あああ……」

まだ下半身が快感に
打ち震えている。

「また来たくなったら
いつでもおいで」

蛇女のこの一言によって、
弟が日夜この洞窟に通う理由が分かった。

そして兄は
弟の存在を邪魔に感じるように
なったという。



















